

本誌ではこれまでたくさんのアーティストに寄稿や取材などでご協力いただき、その取り組みを掲載してきた。今号では、その中から3人のアーティストのその後の活動に焦点を当てた。活躍のフィールドはどんどんと広がりを見せ、さまざまな場所で銅のアートが咲き誇っている。

それぞれの個性が輝きだす——芸大鍛金展 ●篠原行雄氏

長かった夏が終わり、上野の山に短い秋の訪れを感じられるようになったころ、東京芸術大学に併設されているアートプラザを訪れた。本誌169号に随想を寄稿していただいた篠原先生を中心として、鍛金研究室が主催している鍛金展が開催された。

篠原先生にお伺いした。「従来から、私も含め、各々が個展を開いているのですが、研究室全体としての活動はありませんでした。そのため、彫金研究室との隔年開催ですが、アートプラザにお願

いで定期的な鍛金展を開催しています。今回は2回目ですが、教員から院生、学生まで参加していますし、工芸品としての商品開発のきっかけになればとも思っています。」

鍛金展では、銅を中心としてさまざまな金属素材を使った作品が展示・販売されていた。アートプラザではこのような企画展の他、さまざまな作品を常設展示している。



鍛金展に出品された作品



篠原行雄氏

被災地に思いを馳せた新しいプロジェクト ●谷山恭子氏

昨年第2回の瀬戸内国際芸術祭が開催された。前回の芸術祭に男木島という、かつて水が何よりも貴重な地に、銅管で水を引いて雨を降らす「Rainy Lane 雨の路地」という作品を出品した谷山恭子さんを覚えているだろうか？(本誌170号で紹介) その土地で暮らす人たちの話に耳を傾け、作品の基礎としてきた谷山さんは、2011年の震災後、ボランティアに訪れた石巻で被災地を目の当たりに、「今、私はどこにいるのだろうか?」という強い思いに動かされ、新しいプロジェクトを始めた。

地球上のどこにいるかをあらかず緯度経度を計測し、そこにある日常風景の中に「地球上の唯一の場所にいま居る」という実感を持つ空間、作品を作り続けている。



雨の路地



Perspective



谷山恭子氏

子どもたちを優しく見守る銅のオブジェ ●鮫島貴子氏

東京都小金井市の「けやき保育園」。保育園のエントランスを見上げると、かわいらしい銅のオブジェが私たちを迎えてくれる。これは鮫島貴子氏(本誌172号随想寄稿)の作品で、けやきの葉のモチーフに等身大の男の子とその手をしっかりと握る女の子が腰かけている。そのオブジェは、太陽の光を受けると美しく輝きだす。銅のオブジェが放つあたたかい輝きは、まるで保育園の子どもたちを優しく見守っているかのようだ。

鮫島氏は、大学で鍛金を学ぶとともに、単身フランスに渡り、欧州のものづくりについて追究した経歴を持つ。その経験を生かし、国内にとどまらず日本のものでづくりの良さを伝えていきたいと意気込みを語った。



けやき保育園オブジェ



鮫島貴子氏

NEWS

テクニカルフォーラム開催 —超弾性銅合金を用いた制振部材開発

日本銅センターの主要プログラムの一つである「超弾性銅合金を用いた制振部材開発」活動として、建築研究開発コンソーシアム主催によるテクニカルフォーラムが12月5日(木)午後1時より日本銅センターにおいて開催された。

フォーラムには大手ゼネコン各社の設計関連部門や建築金物メーカーなどから13名が参加し、当該合金の制振部材への適用を研究する京都大荒木准教授の講演に熱心に耳を傾けると共に合金開発者の東北大石田名誉教授及び材料メーカーの神鋼メタルプロダクツ社と熱心な質疑応答を交わした。

当該合金は、銅にアルミとマンガンを添加し、更に特殊な熱処理工程を施すことにより超弾性特性を発現させることが特徴で、東北大石田名誉教授の研究室で開発された。当該合金は既に医療

分野に用いられる巻爪矯正具として他の素材メーカーにより実用化されているが、建築用制振部材へは神鋼メタルプロダクツ社が取り組んでおり、今回量産設備を用いた試作試験で優れた超弾性特性を発現することに成功した。

今後は建築関連メーカーなどと協力し、制振部材としての必要特性の調査、求められる特性への素材改良などを行い、市場化を図る。



講演に聞き入る参加者

TOPICS

感染症対策銅装備ショールーム オープン —フランスベッド

フランスベッド(株)では、院内感染対策として、銅を駆使したベッドをはじめ、関連機器、什器を開発してきた。

昨年10月23日から3日間開催された“HOSPEX Japan 2013”(東京晴海・ビッグサイト)において、その成果を発表した。同社のCu+ベッドや、Cu+ベッドテーブルと併せ、共同企業の銅の殺菌特性を活用したIVポール、ナースカート、ドアハンドル、銅繊維を織り込んだキルト、カーテン、タオル、不織布に銅を蒸着したおねしょシートや壁紙などを集め、病室風に仕立て、ディスプレイ。院内感染のリスク低減を図る提案を行った。

これらをさらに発展させ、昨年11月8日、本社(東京・新宿スクエアタワー)内に「感染症対策銅装備ショールーム」をオープンした。病院設計者や病院関係者がひと目でCu+病室のイメージを把握できるようにしたもので、病院、介護施設、保育施設などへの導入を促すツールとして、大いに期待されている。

オープン当日から、多くの医療関係者が訪れ、Cu+病室に熱い視線が注がれていた。



銅機器・什器が並ぶショールーム



ショールーム展示品

- ・Cu+ベッド/サイドテーブル
- ・ナースカート
- ・IVプレート
- ・ドアハンドル
- ・洗面台/蛇口
- ・プレートスイッチ
- ・おねしょシート/壁紙
- ・カーテン

編集後記

「銅」誌もこの号でNo.177をかぞえました。この機関誌の編集方針は、できる限り多くの分野・時代に焦点をあてたトピックをたてることなのですが、銅という視点から新しいものを紹介し続けるのは難しいものです。そこで、この号では過去にご紹介したり、随想を寄稿いただいた方々の近況を紹介させていただきました。みなさんそれぞれの分野でご活躍されています。

「銅」の前身機関誌に掲載された随想再掲載のコナーでは、日本銅センターが設立された年に掲載された、梶山季之先生の「オリンピック寸感」です。昨年、2020年オリンピックの開催が決まり、この原稿を書いている直前にソチオリンピックが終了しました。この随想から当時を懐かしく思い出す読者よりも、この時代をご知らない読者が多くなっているのだと思います。編集デスク 竹中 俊一(日本銅センター)

情報発信委員会

〈委員長〉野田哲也((株)フジクラ)
 〈委員〉鉦山/塚本弘之(三菱マテリアル(株))、
 鏡原俊一(パンパシフィック・銅工業(株))、
 永田禎彦(日本銅業協会)
 伸銅/笹岡公二((株)神戸製鋼所)、磯部剛
 (古河電気工業(株))、谷敬三((一社)日本伸
 銅協会)
 電線/大木啓一((一社)日本電線工業会)、
 ((一社)日本銅センター)和田正彦、幸洋二